

「第3期三木市教育振興基本計画」(案) に対する意見の概要  
及び意見に対する教育委員会の考え方

意見募集期間 令和2年12月25日(金)～令和3年1月29日(金)

意見提出者数 1名(6件)

番号	意見の概要	教育委員会の考え方
1 教員の業務軽減と体験研修		
(1)	<p><b>【教員の業務軽減】</b> 教員の業務内容が教育指導以外で多忙を極めており、教育指導に支障をきたしていると感じる。 部活動や施設管理等の専門外の業務は、地域人材や民間企業等に委ねてはどうか。</p>	<p>教職員の働き方改革を推進するため、部活動指導員や指導補助員については、数年前から配置をしています。 その他の業務についても、登下校の安全を見守る「人の目の垣根隊」、学校施設の開錠や見回りを委託している「シルバー人材」など、地域人材や民間企業と連携していますが、今後もその活用を検討します。</p>
(2)	<p><b>【教員の体験研修】</b> 教員の自己研鑽と生徒指導を目的に、長期休業期間中は教育現場から離れ、生徒に役に立つ研修(日本にはない教育の取り組みをしている国での体験調査、国内ではIT現場、スマート農業、大工等技能の世界等)を体験し、それを生徒に講話してはどうか。身近にいる教員が講話することで、生徒が世界の現状を見つめ、グローバル社会を生き抜くための方向性を見つける教育の一つにしてもらいたい。</p>	<p>教員の体験研修については、初任者を対象に、長期休業中などに、広く社会的視野を広め、資質向上を図るため、民間企業、芸術文化施設、社会福祉施設等で研修を行っています。 また、外国の都市等において、国際交流の促進に資する奉仕活動のため、休業できる制度があります。さらに、教職員が自主的に計画し、大学、大学院、研究所等において、職務に関連があると認められる学術に関する事項の調査、研究又は指導に従事できる休業制度も整えています。その他、外国の教育施設への教員としての派遣、特別休暇を取得して特定のボランティア活動への参加等、教員が勤務する学校以外で、様々な体験ができる制度があり、実際に、日本人学校などで指導者として活躍している教員がいます。 上記の活動に参加した教員が、自らの体験を児童や生徒に伝える機会の充実を図っていきます。</p>

2 生徒の自立心育成	
<p>(3)</p>	<p><b>【生徒の社会体験】</b></p> <p>長期休業期間は生徒にとって将来を見つめる非常に大切な時期であり、教員による研修報告の講話を受けることで、生徒が自らの将来について考え、体験する良い機会となる。英語の勉強のため海外のスクールへ行ったり、本格的にITについて勉強するなど、学校ではできない様々な体験を通じて将来の自分探しをし、休業明けに体験を披露する機会を設けてはどうか。</p> <p>社会体験活動として、中学2年生でトライやる・ウィークを実施しており、5日間事業所等において、職場体験、福祉体験、勤労生産活動などを行っています。</p> <p>また、中学校では、「トライやる」アクション事業として、生徒が地域の良さやふるさとの恵みに触れることができるよう、土、日、長期休業期間中等を利用して、地域行事に児童生徒が主体的に参画するなどの実践的な取組を推進しています。</p> <p>さらに、総合的な学習の時間において、卒業論文として、自分の興味関心のあることについて調べ、クラスや全体の場で発表する機会を設定している学校もあります。</p> <p>一方で、学校外の体験を披露する機会についても検討してまいります。このような取組を、各学校へも紹介し、児童生徒の社会的、職業的な自立に向けたキャリア教育が更に充実していくよう研究してまいります。</p>
<p>(4)</p>	<p><b>【「英語立市三木」の推進（国内語学留学）】</b></p> <p>世界はグローバル化が進み、世界共通言語の英語は切っても切り離せないものとなっている。国内で少しでも英語に馴染める環境をつくるため、国内留学のできる施設を創設し、あらゆる階層の人が自由に参加できる仕組みづくりが必要と考える。</p> <p>例えば、統廃合で廃校になった施設を有効利用し、日常生活を共にしながら英語のみの環境の中で生活することにより、語学アレルギーを解消したり、利用率の低い公民館等</p> <p>グローバル化が進展する社会での活躍に向けて、子どもたちは、語学力やコミュニケーション能力の基礎を身に付けることが必要です。そのために、三木市では、教育課程特例校の指定を受け、小学校低学年から、「聞く」「話す」などの体験を中心とした英語教育に取り組み、豊かな国際感覚を育てています。現在、全学校にALTを配置し、学校生活全般においてネイティブの英語に触れ、親しむ機会を図っています。また、夏休みには、小学生を対象に日帰りイングリッシュキャンプを実施しています。希望する児童がネイティブスピーカーとともに活動することを通して、</p>

	<p>を企業のバックアップや地域人材を活用することにより「英語立市三木」を推進していくことを提案する。</p>	<p>英語でコミュニケーションすることの楽しさや喜びを体感しています。今後、今回提案いただいた統合で閉校になった施設の有効活用や児童生徒が英語に慣れ親しむ学習方法などについては、研究を進めてまいります。</p>
(5)	<p><b>【将来の生計教育】</b></p> <p>今の日本人で自分の将来の生活設計を具体的に持っている人はどのくらいいるだろうか。65歳まで働き、平均寿命まで20年以上どのように生活していくかを考える必要があるのではないか。アメリカではFIRE (Financial Independence, Retire Early) という運動が若年層でブームになっている。これからの日本でも定着する可能性があり、働き方改革に繋がることも考えられる。</p> <p>日本は非正規雇用が多く、収入も先進国といわれる中では低位の部類になってきている。将来を担う人材を今から教育しなければならないが、その知識が備わっていない。</p> <p>各人が独立した生涯を生き抜くための知識と取り組みができる素質を育成し、経済的自立が考えられる人材を育成することが必要と考える。</p>	<p>「生き抜く力」を身に付け、社会の激しい変化に流されることなく、それぞれが直面するであろう様々な課題に柔軟かつたくましく対応し、社会人として自立していくことができるようにする教育が必要であると考えています。</p> <p>そのため、義務教育段階では、キャリア教育を推進する中で、自然体験、社会体験、就業体験、ものづくり体験など、多様な体験活動や地域を支える産業に目を向ける機会を設け、社会と自分との関わりを認識させ、社会の一員としての自覚や社会参画への意欲や態度を養っています。</p> <p>また、経済的自立を考えられる人材を育成するためには、学校教育の取組だけではなく、発達段階に応じた継続的な指導を、家庭や地域と連携して行い、社会的自立に必要な能力を育てることが大切であると考えます。</p>
3 各施設の活用		
(6)	<p><b>【各施設の活用】</b></p> <p>学校の運動場、工作室、音楽室等の施設を長期休業期間に開放して生徒の特性をいかすために利用できる体制を整備する。また、利用頻度の少ない地域の公民館を英会話教育や書道等、誰でも参加できる施設として活用する。運営に当たっては、学生、リタイヤした人達や企業</p>	<p>学校と地域が連携し、地域の実情を踏まえながら、地域住民によるボランティア活動を受け入れる、地域住民との交流を促進するなど、地域の教育力を活用した取組を行っています。</p> <p>また、公民館では、夏季休業期間中に子どもたちに様々な体験をしてもらうことを目的に、スポーツ、絵画、料理、工作など地域の指導者に講師を務めて</p>

人材と共に学ぶ教育施設として活用できるようにして、普段生徒が学べないことや、もっと時間をかけて学びたいことを教員以外の知識や能力を持った地域人材が教える。

公共施設は地域の宝物であるので、さらに有効活用して、教育の場として活用することができると思う。

学校以外で市民や企業等が協力しながら地域の子供達の育成を支援することが大切である。

いただき、学習の楽しさやルールの大切さなどを学ぶサマースクールを実施しています。

今後も、地域全体で子どもたちを見守り、育てることができるよう、人材の確保や地域の教育力を活用した取組を進めてまいります。